

# ジェファソンのモンティチェロ

## ——建国初期文化の一様相——

明 石 紀 雄

アメリカ合衆国の独立および建国初期の歴史においてトマス・ジェファソン(1743-1826)が果たした役割についてはよく知られている。彼はアメリカ独立宣言の実質的な起草者であり、初代国務長官、第3代合衆国大統領などの主要な公職を務め、紛れもなく新しい共和国の有力な設立者<sup>アーキテクト</sup>の一人であった。彼はまた高等教育の充実にも大きな関心を有し、ヴァージニア大学の創設に尽くしたのであった。彼がとくにその校舎群などの設計に自らあたり、他に例を見ないプランを考案したことは有名である。このようにジェファソンは一般に建築の分野においてもすぐれた業績を残したのであったが、その意味でも、彼をアメリカにおける独創的な設計者<sup>アーキテクト</sup>と見なすのはきわめて妥当である。

ジェファソンによる建築図案は現在500枚以上残されている。その中で実際に建てられた公共建造物は、ヴァージニア州議会議事堂(1796年)とヴァージニア大学(1825年)である。前者をジェファソンは、ニーム(フランス)にある古典様式のメゾン・カレを模して設計したのであった。<sup>1</sup>後者は、長方形の敷地に建てられ、一方の端にローマの西暦紀元前1世紀から紀元2世紀にかけて建てられたパンテオン(万神殿)を模した円形の建物を置き、他方の端は開放され、両辺はそれぞれ異なる様式の10のパヴィリオン(教室および宿舎群)よりなる。それはか

つて「1776年以後国内において建てられた最もすぐれた建築」<sup>2</sup>であると認められたことがある。1792年に彼は首都ワシントンに造られることになる大統領官邸案を用意し匿名で応募したのであったが、それは採用されることはないかった。彼の設計になる主な個人住宅としては、彼自身の邸宅モンティチェロ(Monticello)および別荘ポプラー・フォレスト(Poplar Forest)がある。

本論の目的はジェファソンの建築への分野での関心を、次の二つの観点から検討することである。まず第一に、建築はそれが作られる社会または国家の文化的水準を反映するという前提から、ジェファソンがなぜ古典的建築様式——とくにローマのそれ——をアメリカ合衆国に導入するのに熱心であったかを見てみたい。ジェファソンは「均齊美と上品さ」を兼ね備えた建物こそが理想的であると考えていた。<sup>3</sup>そして、そのような建築の原理は古典的様式に最もよく見られたのであるから、アメリカ人にとって模範となるのは古典的様式であると見なしたのであった。そうすれば、国民の間の文化的水準が飛躍的に高まると確信していた。しかし、すぐれた建物が作られるということは、単に文化的水準が上昇するというレベルにとどまるものではなかった。彼は、一国の建築が進歩するならば、それは生活の他の面——たとえば政治や経済のあり方——においても継続的な改善がなさ

1. ジェームズ・マディソン宛ての手紙で、ジェファソンはメゾン・カレは「古代人が残した建築の中で最も美しく価値あるものの一つである」と述べている。To James Madison Sept. 20, 1785 (Thomas Jefferson, *Writings* [New York: Literary Classics of the United States, 1984], p. 829).

2. Frederick D. Nichols, "Architecture," in Lally Weymouth, ed., *Thomas Jefferson: The Man, His World, His Influence* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1973), p. 232.

3. Jefferson, *Notes on Virginia*, "Query XV" (*Writings*, p. 279).

れる可能性の大きいなる示唆であると見ていた。いいかえれば、建築の進歩は新しい共和国としてのアメリカ合衆国の存立と密接に結びつくというのが彼の信念であり、彼の高邁な共和主義的ヴィジョンは建築のあり様にも及んでいたのである。

第二に、建物は建築主の性格を反映するというしばしばなされる指摘をふまえて、建築に対するジェファソンの強い個人的関心の背景および結果を探究してみたい。<sup>4</sup> なるほどジェファソンは、「作りそして壊すこと」(putting up and pulling down)<sup>5</sup> は自分の「好きな楽しみの一つ」であると、幾人かの訪問者に語ったことがある。このような熱意があったからこそ、彼は自分の邸宅を理想的なものに近づけるべく、生涯を通じて改築し続けたのであった。その絶え間ない努力には明瞭に彼の性格が反映されていたというのが、今日広く受け入れられている解釈である。モンティチェロがユニークな建造物であることは疑いの余地はない。それは居住の場所であると同時に、彼の経済的基盤＝農業経営の中心としてあった。優雅さおよび快適さと並んで、そこでは機能性が追求されたのであった。公的な空間が用意されていると共に、プライヴァシーを守るための凝った工夫が至るところに盛られている。ジェファソンの生きた時代（革命および建国期）が「矛盾に満ちた」<sup>6</sup> 時代であり、モンティチェロはそのすぐれた反映であったと断定することは性急にすぎるかも知れない。しかしその反対に、もしモンティチェロが他に例を見ない建物であるならば、それは多分に彼の複雑な性格によるものであったと見なすことに大きな異議はないであろう。いわば心理学的観

4 . Jack McLaughlin, *Jefferson and Monticello: The Biography of a Builder* (New York: Henry Holt & Co., 1988), pp.202, 363. 本稿は同書およびWilliam Howard Adams, *Jefferson's Monticello* (New York: Abbeville Press, 1983)によるところが大きい。

5 . ジェファソンのこの言葉は、B.L. Rayner, *Sketches of the Life, Writings, and Opinions of Thomas Jefferson* (1832), p.524において初めて言及された。この指摘は、Dumas Malone, *Jefferson and His Time*, III, *Jefferson and the Ordeal of Liberty* (Boston: Little, Brown and Co., 1962), p.222による。

6 . McLaughlin, p.341.

点からモンティチェロについて——その純粹に建築学的側面とそこで営まれた生活の実態——検討するのは、このような問題意識があるからである。

## I 「建築についての高貴な精神」

独立戦争の最中サラトガ（ニューヨーク）の戦いで敗れ捕虜となり、シャーロットビル（Charlottesville）に移され、そのキャンプに収容されたドイツ人傭兵の一団があった。当時（1780年）ジェファソンはヴァージニアの知事であり、捕虜たちのうち士官をモンティチェロに招いたことがある。その一人が「知事は建築についての高貴な精神を有し、自らの想像力に従って、優雅な邸宅を作りつつある」という感想を残しているのは興味深い。<sup>7</sup> またロシャンボー将軍指揮下のフランス軍の士官であったシャストゥルックス（Chastellux）——彼はフランス・アカデミー会員であった——は、戦争終了後間もない頃（1782年）モンティチェロにジェファソンを訪れ、「雨や風をしのぐ安全な避難所を作るのに芸術を参考にした最初のアメリカ人」に会ったと記している。<sup>8</sup>

ジェファソンは建築に関する知識の初步を、測量技師であった彼の父から学んだのであった。しかし、恒久的かつ大がかりな建造物に関する情報および設計の技術の多くを、彼はほとんど独学で得たのである。このことは、彼の蔵書中に建築に関する基本的図書が何点か含まれていたことからうかがい知ることができる。たとえば、ロバート・モリス（Robert Morris）の『建築技法書』（1755年）、アンドレア・パラディオ（Andrea Palladio）の『建築四書』（1570年）、ウィリアム・シェインバーズ（William Chambers）の『中国図案』（1757年）などは当時広く読まれていたものであり、ジェファソンはそれらを保有していたのであった。彼がいかにこれらの

7 . Merrill D. Peterson, ed., *Visitors to Monticello* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1989), p.8.

8 . *Ibid.*, p.12.

書物を熱心に読み、そこに見出されるレッスンを吸収していたかは、彼の図案に示される洗練されたデザインおよび正確な製図技術に十分に示されている。<sup>9</sup>

とくにジェファソンが参照したのは、彼が建築学上の自分の「聖書」と呼んだパラディオの前掲書である。ジェファソンがこのルネサンス期のイタリアの建築家の理念に共鳴した理由を考えてみたい。<sup>10</sup>

パラディオは古典的様式すなわちローマ時代の建築を研究し、それを基に主に田園的邸宅(ビラ villa)を数多くデザインしたのであった。彼は調和と均齊美の原則を強調し、シンメトリー(対称)の原則を重んじ、外部と内部の装飾の一致を主唱したのである。具体的に彼は、ポルティコ(柱廊玄関)を中心部に擁し低い両翼を持つ主屋を中心に、付属した一連の建物がそれを囲む——あるいはそこから延びる——というプランを採ったのである。さらに、全般的に、パラディオの設計になる建物は質素さを感じさせる。周知の通り、ジェファソンは田園的価値観を保持していたのであった。そのような観点からすれば、彼がパラディオの建築理念に引かれるに至ったのは、きわめて当然であったといわなければならない。

ジェファソンがすべて書物から得た知識をもとに建築図案を作成したと見るのは正しくない。彼は1784年から1789年まで駐仏公使としてパリに在住したのであったが、その間イギリスおよびイタリアを旅行し、数多くの建築を見る機会を持ったのである。その中には古代および中世からのもの、近年に完成したもの、あるいは建築中のものがあり、その幾つかをとくに关心をもって観察したのであった。それらを挙げるな

9. ジェファソンの設計図案は、Frederick D. Nichols, *Thomas Jefferson's Architectural Drawings*, 3d ed. (Charlottesville: University Press of Virginia, 1961) に多くを見ることができる。邦語文献としては「トマス・ジェファソン」(デイヴィッド・ゲバード/デボラ・ネヴィンズ著・谷川正巳/増山博文訳『図面で見るアメリカの建築家』[鹿島出版会、昭和55年])、82-86頁が詳しい。

10. パラディオの建築理念については、Adams, p.22 以下を参照。

らば、まず彼が公使官邸として用いたオтель・ドゥ・ランジャクがあった。それはシャンゼリゼ通りに面しており、やや不規則な敷地に建てられていたが、かえってジェファソンの目には美しくまた斬新に思われたのであった。たとえば、彼は天窓のある円形のサロン(広間)や目立たない階段、それに当時としては最新の流行であった屋内トイレに印象づけられたのである。さらに庭園内を巡回する散歩路のデザインにも注目したのであった。これらの新しい要素をジェファソンはモンティチェロにも採り入れることになる。

次に彼の目を引いたのは、その頃セーヌ河畔に建設中のオтель・ドゥ・サルムであった。全体は長方形であるが、中央部は半円形のペイ(柱間)で円柱を擁し、屋根はドーム式で、高い天井の一階建てである。両翼の私的な部分は本来は二階建てであるが、外からは一階建てに見える。その建物に「いたく打たれ」たジェファソンは、まるで「恋人に会いに行くように」毎日それを見に出かけて行ったのであった。<sup>11</sup> ヨーロッパから帰った後、ジェファソンは出発以前に手がけていた未完の邸宅(第一次モンティチェロ)を大幅に改築するのであるが、改築案がこのオтельに類似したものになったのは決して偶然ではなかったのである。

三番目はブレッド・アルである。中央市場として用いられていたこの建物は、採光をよくするために木枠を組んだ直径40メートル余りのドーム(円形屋根)が特徴的であった。ジェファソンは1786年夏のある一日を細密画家マリア・コズウェイ(Maria Cosway)と共にここで過ごしたのであった。後に見るように、ジェファソンの改築案はドームのついた部屋を三階に含むのであるが、おそらくコズウェイへの思い出が働いていたからであろうというのが、今日一般的な解釈である。<sup>12</sup>

11. To Madame de Tesse, Mar.20, 1787 (*Writings*, p.891).

12. マリア・コズウェイとの関係については、五十嵐武士「トマス・ジェファソン」(『自由の新天地(人物アメリカ史1)』[集英社、1984年]、161-90頁)に述べられている。

## II 建物の構想

ジェファソンは21歳に達したとき（1764年）、父から譲り受けているアルブマール（Albemarle）郡の約2000エーカー（約720ヘクタール）の土地を実際に相続する資格を得る。彼はその中心にあたる部分をイタリア語で「小さな山」を意味するモンティチエロと名付け、そこに自らの邸宅を建てる計画を持ったのであった。<sup>13</sup>当時ヴァージニアには、マンションまたはプランテーション・ハウスとして知られる大農園主の邸宅が数多くあり、豪華さを競っていた。ジェファソンはとくにテイロウ（Tayloe）家のマウント・エアリー（Mt. Airy）を好んだのであったが、それはパラディオの様式を踏まえたものであった。しかし彼は幾つかの公共のものを除いて、ヴァージニアに見られた建築についておおむね批判的であった。マンションについては優美さが欠けていること、そして木造の私的住宅については、耐久性がなく継続的改良がなされる余地がないというのがその主な理由であった。

「石やレンガで造られていることはきわめて稀であり、もっとも多いのは木割木材と薄板でできていて、石灰でしつくいが塗られているものである。これ以上に醜く、居心地の悪い、しかも——幸いなことに——腐りやすい物体を考え出すことは不可能である。……建築の悪魔がこの土地に呪いをかけたのではないかとさえ思える。」<sup>14</sup>

ジェファソンはこのような認識から、ヴァージニアひいてはアメリカの建築のレベルを高めることを自らの使命として感じていたかのようであった。

13. ジェファソンが初めてモンティチエロに言及するのは「園芸記録」（The Garden Book）の中で「1768年8月3日モンティチエロにて桜を接種」と記録したときである。Robert C. Baron, ed., *Thomas Jefferson's The Garden and Farm Books* (Golden, Colo.: Fulcrum, 1987), p.51.

14. Notes on Virginia, "Query XV" (Writings, pp.278-79).

具体的に、ジェファソンはどのような建築の構想を有していたのであろうか。彼は二つの原則を適用することによって、モンティチエロを彼の理想とする住宅に造る案を練っていた。すなわち、田園風邸宅を建て、そこにあって「崇高さ」の概念を追求することであった。

### (1) 田園風邸宅（ビラ）

ジェファソンは当初からモンティチエロに田園風邸宅（ビラ）を建てる構想を有していたように思われる。それはローマ時代の貴族が好んだ様式であった。いわゆる田園的生活がいかなるものであるかについて、パラディオは次のように描いている。まずそれは、農業に基盤を置いていることが肝要である。そこでは住人は怠惰であってはならず、不断の努力と周到な管理により富を増加することが試みられなければならない。次に、毎日の乗馬および徒歩による運動によって、健全な肉体と精神が育まれる。もし都会での生活に疲れた者があれば、田園風邸宅での生活は必ずや癒しとなる。いいかえれば、そこでは主に「個人的および家族に関する諸事」が司られるのである、と。<sup>15</sup>

ジェファソンにとって癒しの場を持つことは大きな意味を有するものであった。とくに公的生活への関わりが頻繁にそして深くなつてからは、その願望は強まる傾向にあった。たとえばヨーロッパにあった頃、彼はジョージ・ギルマー（George Gilmer）宛に次のような書簡を送ったことがある。

「[1787年8月12日付] 私は他のどの場所にいるよりも、どのような仲間と交わっているよりも、モンティチエロにいる時の方が幸せを感じます。私のすべての願いは、私が自分の生涯を閉じたいと念じておりますモンティチエロにおいて達成されるであります。」<sup>16</sup>

また、ジョージ・ワシントン（George Washington）政権にあって財務長官アレクサンダー・ハミル

15. 古代ローマ時代のビラでの生活については、Adams, pp.47-48 によった。

16. Julian P. Boyd, ed., *The Papers of Thomas Jefferson*, XII (Princeton: Princeton University Press, 1955), p.26.

トン(Alexander Hamilton)との論争が激しかったとき、ジェームズ・マディソン(James Madison)宛に次のように書き送ったのである。

「[1793年6月9日付] 私の血の流れはもはや世界の鼓動とは合わなくなっています。そのために私は、私の家族のひざと愛の中に、私の隣人と書物の中に、私の農園とそこでのさまざまな仕事の中に……幸せを求めるのであります。[このように私に安らぎを与えるものと] 今の私の状態、すなわち毎日朝から晩まで他人にとって何の役に立たず自分にとっては煩わしい一言である仕事に没頭し……私が愛するすべてのものを失い、その代わりに私が好まないものを手にしなければならない状態、とを比べる基準などありますか。」<sup>17</sup>

事実、ジェファソンはこの年の最後の日に国務長官を辞し、数日後にはモンティチェロに戻るのであった。その後ワシントンから特別使節としてスペインに赴くことを打診されたのであるが、彼の反応は予想されたものであった。彼は、

「私は静けさを望むものであります。政治が私の生活に入りそれが失われることがないように願っております」<sup>18</sup>

といい、ワシントンの申し出を丁重に断ったのであった。

## (2) 「崇高さ」(sublime)の概念

モンティチェロはヴァージニア西部ピードモント台地に位置し、周囲はなだらかな丘陵地帯で、すぐ西はブルー・リッジ山脈に連なっていた。そこからの眺望は美しい。ジェファソンは周囲の山々を含め、そこは「アメリカ合衆国のエデンである」と述べたことがあったが、あながち誇張ではなかった。

自然の光景を「エデン(楽園)」のようであ

17. *Writings*, p. 1010.

18. May 14, 1794; quoted in Fawn M. Brodie, *Thomas Jefferson: An Intimate History* (New York: W. W. Norton and Company, 1974), pp. 277-78.

19. To the Comte de Volney, Apr. 9; quoted in *ibid.*, p. 276.

ると描くのは一つのレトリックであるが、18世紀に広まっていた美的基準はさらに別の呼び方をもって、人の目を引く光景を描写することを可能にしたのであった。すなわち「崇高な」(sublime)という呼び方である。それは単に見て美しい(beautiful)、あるいは、絵になるように美しい(picturesque)ものを指すのとは異なり、とくに畏敬の念を起こす(awe-inspiring)ものを表すのに用いられた概念であった。聳え立つ山、深い峡谷、激しい雲の流れなどを見ると、人はこのような感覚を持つに至ると考えられたのであった。<sup>20</sup>

ジェファソンはヴァージニア南西部にある石灰岩が河の侵食でできたナチュラル・ブリッジ(自然橋)を描写するのにこの概念を用いている。彼の唯一の著書『ヴァージニア覚書』(1785年)の中の次の箇所はしばしば引用される。それは「自然の仕業の中でもっとも崇高な」(下線一引用者、以下同じ) ものであり、

「崇高な光景に接した時に湧き起る感情が、この自然橋を見る時ほど高まることはない。崇高で、軽やかで、天に届くかのように聳えるこのアーチは、何と美しいのであろうか。それを見る者の歓喜は言葉で表すことは不可能である。」(質問5)<sup>21</sup>

モンティチェロから目撃される光景を描くのに、彼はこの言葉を用いる。パリで会ったマリア・コズウェイにアメリカに来ることを呼びかけた有名な恋文「我が頭と我が心」の中にも、それは現れる。

「[1786年10月12日付] そうだモンティチェロがあるではないか。目の前で自然がこれほどまでに豊穣なマントをひろげているところが、どこにあろうか。山脈があり、森があり、岩壁があり、川がある。大いなる莊重さをもって馬で嵐の上を駆けめぐることになろう。自然の作業場を見下ろし、雲、あられ、雪、

20. 拙稿「18世紀アメリカの社会と自然」(『アメリカ研究』9、1975年、15-32頁) 参照。

21. *Notes on Virginia, "Query V"* (*Writings*, p. 148).

雨、雷、このようなものすべてが足元で作られるのを眺めるのは、何と崇高なことであろう。燐然と輝く太陽は遠くの水面から昇るがごとく、山の頂を滑りながら自然全体に生命を惠むのだから。<sup>22</sup>

そのような感覚は、モンティチエロを訪れる者の多くがジェファソンと共有できるものであった。たとえばマーガレット・ベイヤード・スマス (Margaret Bayard Smith) は次のように記している。

「ついにわれわれは頂上に着いた。私はこの崇高な光景を見たときに生じる感動を忘ることはできないであろう。……それはこの地上における他のどこよりも広大な眺望を呈するものである。」<sup>23</sup>

また、ヘンリー・C・スウェット (Henry C. Thweatt) の場合は、突然の嵐と雷が1時間ほど続きその後止んだ後に自分の心に生じた感情を、ジェファソンに直接伝えたのであった。

「私の人生でこのような怖れの気持ちを持ったことはありませんでした。……真実恐れたというより、莊厳さと崇高さを静かに感じたのです。」<sup>24</sup>

さほど高くはないが山の頂きにかなりの規模のプランテーション・ハウスを建てるとするジェファソンのヴィジョンは、決して気まぐれであった訳でもなく、また全くの空想でもなかった。そこには確固とした目的と、一貫した建築の原則とがあったのである。彼は物理的および精神的意味のいずれにおいても、“昂揚”を求めていたのである。

かくてジェファソンは、建築理念上の課題を田園的邸宅を建てるこことによって解決できたのであった。しかしジェファソンのそのヴィジョンはどの程度達成されたのであろうか。

### III 建物の歴史

ジェファソンは1768年5月15日、ジョン・ムア (John Moore) とクリスマスまでに山頂の「250平方フィート」の地面を平坦にし、それに対して「小麦180ブッシュルととうもろこし24ブッシュル」を払うという契約を結ぶ。ここに、モンティチエロの建設は始まった。<sup>25</sup> その頃までにジェファソンが最終的な建築案を有していたかは定かではない。しかし、1772年8月までには彼は設計図を用意していたことは明らかであり、それに基づいて造られた建物——実際には未完の部分がかなりあったが——を、便宜上第一次モンティチエロと呼ぶ。

#### A. 第一次モンティチエロ

記録によれば、第一次モンティチエロの工事は1790年代の中頃まで続けられたとある。それは後に大幅に改築されることになるので、完成すればどのような建物になったかについては、ジェファソン自身の手による図案（図1）を基に想像する他はない。同図および他の関連資料から、ジェファソンは第一次モンティチエロについて以下のような構想を有していたことが分かる。

1. 全体は、主屋(house)と両方向にL字型に延びる付属建物(accessories)からなる。  
(これはパラディオの設計した田園風住宅に見られたプランであった。ただしモンティチエロの場合、付属建物は山の斜面を利用している関係上、地下または半地下となる。)
2. 主屋の中央部は奥行きのある二階からなり、両翼は各一部屋からなる一階とする。二階に自分の寝室と書斎を置き、一階はサロン(広間)として用いる。(ジェファソンはこの構想をおそらく前出の、イギリスにおけるパラディオの熱心な追随者であったロバート・モ里斯から得たものと思われる。)

22. *Ibid.*, p.870.

23. *Visitors*, p.46.

24. Quoted in Adams, p.116.

25. McLaughlin, p.154.

3. 主屋の中央部は、一階、二階ともにポルティコ（柱廊玄関）を擁する。（この構想もパラディオに拠ったものである。）
4. 庭園は当時イギリスで流行しつつあった不規則状のレイアウトに従うものとする。（多くの草木や花を育て、また見晴らし台・岩屋や滝を作り、さらには動物を放し飼いにする構想をもジェファソンは持っていたようである。この点については、彼はトマス・ホイットリー（Thomas Whately）の『近代庭園学』のような書物からもヒントを得ていたと思われる。）
5. 付属建物の両端にはパヴィリオン（あづまや）を置く。（南西側のそれはモンティチェロにおいて最初に建てられた設備であり、そこは邸宅の他の部分ができあがるまではジェファソンの書斎・応接室・寝室として使われたのであった。そして、妻マーサ（Martha）との新婚生活を始めたところでもあった。）

後の改築案に比べるならば、第一次モンティチェロの規模ははるかに小さい。しかしそれでも工事は難行し、その進捗の様は10年以上経った後でもジェファソンが満足できる度合いから遙かに遠いものであった。とくに東側の二階のポルティコ、および、主屋と付属建物を結ぶ地下道は未完成であった。その最大の理由は、ジェファソンの長期的な不在であった。たとえば彼は1784年から1789年まで駐仏公使としてヨーロッパにあったのであった。帰国後も多忙な公務ゆえに、ジェファソンは自分のプランテーションの経営および邸宅の工事に対して十分な管理を施すことはできなかった。しかし1794年の初めに公務から解放され、彼はモンティチェロに戻る。漸く自ら建築工事を監督できる状況に身を置くことになったのである。その際彼は当初のプランの完遂ではなく、大規模な改築を念頭に描くに至るのであり、建物の歴史はこの後新たな段階に入ることになる。

## B. 第二次モンティチェロ

改築にあたり、ジェファソンは次の三点を考

慮しなければならなかった。すなわち、

- \*主屋の大きさを倍にすること
- \*一階建てのイメージを維持すること
- \*前の建築に使った材料を活用すること

である。第一の点についていえば、東西ならびに南北に二倍拡大することにより、建物の面積は四倍に広がることになった。第二の点は、実際には二階（中心部は三階）を持つことになるが、中心部の天井を高くし、両翼の窓に工夫を加えることにより達成された。ジェファソンの予想に反して、第三の点は最も実現が困難であることが判明した。たとえば彼はレンガの再使用を望んだのであったが、解体の過程でその多くが破損してしまい、ごく限られた数のみが再使用可能になったのである。また東側の一階のポルティコを移動する作業はきわめて難行し、なおかつ完全にはなされなかつたのである。

図2は改築案の一階の平面図である。斜線の部分が改築前のフロア・プランである。同図および関連資料から、第一次モンティチェロと第二次のモンティチェロは次の諸点で顕著に異なっていることが明らかになる。

1. 主屋は三階の構造で、一階の東西にポルティコ（柱廊玄関）を持つ。内部はエントランス・ホール（玄関間）、パーラー（応接間）、ダイニング・ルーム（食堂）、ティー・ルーム（茶室）、ジェファソンの寝室・書斎・図書室、三つの寝室、そしてピアツツァ（ポーチ）からなる。一階の寝室のベッドはすべて壁に組み込まれている。
2. 二階には六つの寝室が置かれる。ただし各部屋の窓は床から壁の半分までの高さしかない。
3. 三階には三つの寝室とドーム・ルーム（円形の部屋）が置かれる。パーラーの上にあたるドーム・ルームは第二次モンティチェロの「主要なモチーフ」<sup>26</sup>となるはずであったが、ジェファソンが何の目的でこのような部屋を含めたかは明らかではない。<sup>27</sup>

26. Adams, p.95.

4. ヴァージニアの他のプランテーション・ハウスに見られるような豪壮な階段はなく、最小のスペースしか取らないように設計されている（幅60センチメートルの螺旋状）。
5. エントランス・ホールの北の角にバルコニーが作られている。これは二階の南北を結ぶ唯一の手段である。
6. エントランス・ホールはイオニア式、パーラーはコリント式、ダイニングルームはドーリア式の装飾が施されている。また主だった窓や扉の上にはペディメント（三角形の切り妻壁）が置かれ、また壁と天井が交わるところなどにも模様が付けられている。かくて外装および内装とも古典的様式で統一されている。
7. パーラーの床の寄せ木細工、自動開閉扉、ダムウェイター（回転式給仕扉、外から料理を運ぶのに給仕を必要としない）、ワイン運搬エレベーター、風向計、週間時計などの工夫が凝らされている。
8. 付属建物として調理場、洗濯場、馬小屋、食糧の貯蔵所、酒倉、燻製室、氷室、手洗いがテラスの下に造られ、地下道を経て主屋につながっている。雨水を貯える設備も置かれている。これらは第一次モンティチェロにおいても考案されていたが、完成したのは第二次モンティチェロにおいてである。
9. テラスおよび屋根のつすりに中国風の模様が用いられている。

さらに次の諸点もユニークであり、注目する必要があるであろう。第一は、墓地が西方の少し下がったところに造られたことである。第二に、南側の斜面に野菜園および果樹園が置かれ——その規模は長さ300メートル、幅9メー

27. マクローリンはドームには母性的イメージがあるとし、このような部屋を造ったことはジェファソンの複雑な心理の現れであったという仮説を示している。(McLaughlin, p.254)。この仮説をさらに発展させているのがフォーン・ブローディで、「作りそして壊すこと」も性的なニュアンスがあるとする。同様に、ジェファソンが八角形のデザインを多く用いていることも建築主の内面的性格が影響していると見る。Brodie, pp.284ff.

トル——当時まだ珍しかったトマトやごま、ジェファソンの好物であった豆類が栽培されたのであった。さらに、ジェファソンのアメリカにおいてすぐれたワインを生産するという願望を反映して、ぶどうが作られた。第三に、主屋と野菜園・果樹園の間に置かれたマルベリー・ロー (Mulberry Row) が注目される。これはほぼ120メートルの長さの道で、桑の木が植えられていたことからその名が由来する。しかしその重要なのは、この道路に沿って10以上の建物が並んでいたことである。それらは仕事場（製材、建具、鋳冶、石工、釘、酪農、燻製、洗濯、貯蔵、家畜小屋）であり、また一部の職人や奴隸の居住場所であった。したがってマルベリー・ローは、いわばプランテーション（農園）としてのモンティチェロの中心部を構成していたのであった。

このような野心的なプランは実現したのであるか。ジェファソンは1796年3月に楽観的な調子で一知人に宛てて、「私は建物の解体を始めました。夏の間に改築が終わるものと期待しています」と書いたのであったが、おそらく彼の生涯のうちでも最大の誤算の一つとなることをその時は知る由もなかった。<sup>28</sup> そして3年後に「この家を再び人が住めるようにすることはないように思われる」と、悲観的に述べるのであった。<sup>29</sup> 実際にはジェファソンはこの期間アメリカ合衆国副大統領の職にあったのであったが、任期の半分以上をモンティチェロにおいて過ごしたのである。公的にはこの時期彼は必ずしも幸運ではなかったが、私的には——少なくともモンティチェロの建築に関する限り——恵まれていたといえよう。しかし、この幸せも1801年に彼がアメリカ合衆国大統領に選ばれることにより大いに減じることになる。それは、第二次モンティチェロの完成がさらに遅れることを意味するものでもあった。

1802年にモンティチェロを訪れたアナ・マリ

28. To William Giles: quoted in McLaughlin, p.259.

29. Quoted in Paul Wilstach, *Jefferson and Monticello* (Garden City: Doubleday, Page and Company, 1925), p.98.

ア・ソーントン(Anna Maria Thornton)は、それが未完であることに驚きを禁じ得なかった。彼女の次の言葉は、ジェファソンの真意がどこにあるか計り得ず、当惑している様を如実に物語る。

「ジェファソン氏は27年この方建築計画に手を加えてきました。しかしあまりにもしばしば壊し、また建て直しています。だから何も完成していませんし、今後もそれは望むべくもありません。多くの資金が地上および地下の部分のために使われましたが、最も有効に使われたとは思われません。……建物は[未完成であることより]建てるのに長く時間がかかり過ぎていることから朽ちるであります。」

しかしソーントンが、建物自体がある種の崇高さを有していたとする印象を記しているのは興味深い。

「全体があら削りのままです。[未完の] 建物全体には快適さあるいは便宜さよりも、威厳とか莊重さが感じられます。それはそこに住むよりも、遠くから眺めるのが望ましい建物であります。」<sup>30</sup>

第二次モンティチェロの建築が始まってから数年経っても未完であったということから、ジェファソンを初め、家族も、訪問客もかなりの不便を耐えることが要求されたに違いない。それは決して快適なことではなかったであろう。しかし完成を夢見て自らを慰めることができたジェファソンにとっては、通常の困難は容易に忍耐できる範囲内にあったのである。

ジェファソンは主として古典的様式に依拠しながら、ヴァージニアの条件に合致したデザインを追求したのであった。その結果モンティチェロは、おそらくパラディオやモリスが想像した以上にユニークな建築デザインを有するものとなった。ジェファソンは18世紀ヴァージニアの土壤に、ウィリアム・ハワード・アダムズの

言葉を借りるならば、ヨーロッパの貴族的な建築の伝統的な「スタイルと優雅さ、理想と抑制」を「移植」したのであった。<sup>31</sup> まさに建築学の分野における顕著な達成であった。

他方、モンティチェロが一貫性に欠け、芸術的完成度において不十分であったことは認められなければならない。しかし、純粹に高い美的基準に到達したか否かという以上に問われなければならない重要な一つの問い合わせがある。すなわち、現実的にジェファソンがそこでどのような生活を送ったかということである。そのような観点からの検討なしには、ジェファソンとモンティチェロの関係のすべてを明らかにしたことにならない。

### C. 田園的生活の現実

1809年3月にジェファソンはワシントンから戻り、文字通りモンティチェロに隠棲することになった。それはヴァージニアの農園主として彼が求めていた理想的な生活であり、彼が長年望んでいた夢が、まさに実現するかに思われたのである。その喜びを裏書きするように、彼はワシントンを離れる直前に次のような書簡を一知人に送ったのであった。

「数日のうちに私は自分の家族、書物、農園に戻ることになります。安全な隠れ場所を見出でて私は、いまだに嵐と戦っている友人たちのことを憂慮の念をもって思うのであります。彼らに対し決して羨望の気持ちを持つようなことはありません。鎖をはずされたどの囚人も、権力の束縛を離れて私が味わっているほどの解放感を味わったことはないでしょう。」<sup>32</sup>

モンティチェロに戻ったときの彼の喜びがいかばかりのものであったかは、次に挙げる書簡の言葉からもうかがうことができる。

「私は今モンティチェロで隠棲を始めました。ここで私は私の家族の胸に抱かれ、私の書物に囲まれております。私は長い間与えら

30. *Visitors*, pp.34-35.

31. Adams, p.203.

32. To Dupont de Nemours, Mar.2, 1809 (*Writings*, p.1203).

れなかった静けさを味わっております。朝食から晚餐の時間まで、私は仕事場や庭園にいるか、農園で馬に乗っているかです。晚餐から暗くなるまで、隣人や友人と交わることにしています。そして蠟燭がともされてからは、就寝時まで読書します。<sup>33</sup>

これより早い時期（1795年）であったが、ジェファソンはモンティチェロにおいて自分は「真実の農夫」になったと記したことがある。そこにあって彼は「自分の菜園で採れる桃、ぶどう、いちじくを食べ」、「農園を測量し、鋤を使い、干し草を刈り」、「何人にも害を与えることなく、可能な限り多数の人々を助ける」ことを願ったのである。<sup>34</sup>大統領を辞して本格的に隠棲してからジェファソンは、このような生活を実際に追求することができたのである。

豪壮な田園的邸宅（ビラ）に住み、農業に従事し、優雅な文化的生活を享受していたローマ時代の「家長」（paterfamilias）のイメージが、ジェファソンのそれと重なるのは否めない。<sup>35</sup>しかし二つの点において、モンティチェロの生活はつつがない田園のそれであったという解釈に若干の修正を加える必要がある。すなわち、第一は、田園的生活を追求するのに熱心なジェファソンであったが、彼が真に望んでいたのは、隠棲つまり「癒し」がもたらされることより、外部の世界からの隔離——その度合いは「ほとんど強迫的」<sup>36</sup>であったとジャック・マクローリンは述べている——ではなかったかという点である。そして、第二は、モンティチェロの運営はそのほとんどすべてを奴隸の労働に依存していたという事実である。

訪問客に対するホスピタリティーとはうらはらに、ジェファソンは実際には外部の世界が自分の生活に入り込まないように警戒していたかに見える。これは見方を変えれば、自分の内面

が明らかにされることを極度に躊躇するということになる。モンティチェロの場合におけるその具体的な例は、階段が非常に狭く螺旋状であったこと、あるいは、ジェファソンの寝室と書斎および図書室へのアクセスが極めて限られていたことであった。後者についてさらにいえば、そこへは、ジェファソンの案内がなければ他人は決して入ることは認められなかつたのであり、窓に厳重な目隠しが付けられていたのであった。ジェファソンが大統領を辞めた直後にモンティチェロに彼を訪れたマーガレット・メイヤード・スミス（前出）が、建物のとくに私的的部分はジェファソンの“sanctum sanctorum”（至聖所）であると呼んだのは、鋭い洞察であった。<sup>37</sup>

他方、モンティチェロには常時60人以上の奴隸があり、彼らは農園作業および屋内労働に従事し、大工・釘職人・御者としても働いていたのであった。ジェファソンの奴隸制に対する態度ならびにモンティチェロにおける人種関係について詳細に論じることは本論の範囲を超える。<sup>38</sup>ここでは理想的な建築を追求していたジェファソンではあったが、奴隸制の現実は否定できなかったことを指摘するにとどめる。つまり屋内の仕事に携わる奴隸以外にも、崇高であるはずの主屋からの景観に、当然奴隸の姿は見えたはずであった。前出のマーガレット・メイヤード・スミスは次のように記している。

「われわれは奴隸と職人のためのアウトハウス〔戸外の小屋〕のそばを通りました。それらは他のプランテーションで見たものより

37. *Visitors*, p.48. ジェファソンはシャーロットヴィルの南西約110キロのベッドフォード(Bedford)郡にさらに隠棲できるところとして別荘ボプラーフォレストを建てたのである（1806年）。アメリカ合衆国で八角形のデザインを基調にした最初の建物であるとされるが、プライヴァシーの確保と母性的イメージの追求という二つの目的を同時に達成させたという意味でも注目される。長い間個人の住宅としてあったが、近年ボラー・フォレスト記念財団の所有となり、復旧の作業が進められている。

38. ジェファソンの人種観については、拙稿「ジェファソンの黒人観」（『同志社アメリカ研究』7、1970年、22—39頁）参照。

33. Adams, p.248.

34. To Maria Cosway, Sept.8, 1795: quoted in Brodie, pp.279-80.

35. カール・レイマン（Karl Lehmann）による評価。Adams, p.161.

36. McLaughlin, p.256.

は良好な状態にありました。しかしこのような光景を見慣れていない目には、それらはみすぼらしく映りました。その近くに立っている建物〔主屋〕と比べるならば、対照的に不快感を覚えるものでした。」<sup>39</sup>

モンティチェロでの田園的生活が真に「エデン（楽園）」のようであったかどうかについては議論の余地がある。かりにこの問い合わせへの答えが肯定的であったと仮定しても、農園経営の困難さ（土地の疲弊、表土の流出、現金の不足など）が常につきまとっていたこと、および家族の問題（妻マーサの死〔1782年〕、長女マーサの夫トマス・マン・ランドルフ(Thomas Mann Randolph)の奇行、末娘マリア(Maria)の死〔1840年〕など）が生じていたことなどにジェファソンが憂慮していたのは間違いないからである。しかし他方で、彼の「場違いの樂觀主義、個人的苦難に対する無関心、新しい変化を目前にしながら従来の生活様式に固執する頑迷さ」が指摘される。<sup>40</sup>これらのことから、彼が財政的基盤を無視して「家長」にふさわしい生活スタイルを追求するのに熱心であった反面、彼の田園的生活が実際には脆いものであったことを考慮する必要があるのではなかろうか。少なくとも彼の死後の建物の歴史はそのことを如実に物語る。

#### IV 「アメリカのモンティチェロ」

図3は今日のモンティチェロを示す。ユニークな建築様式を誇り、その建主の性格が至るところに露呈されているモンティチェロは、ジェファソンの個人的所有物とするにはあまりにも深くアメリカ合衆国建国期の歴史と関わっていた。各部屋に陳列された品々は、彼自身の発明品を含めて、公的性格と私的性格が見事に混合したものである。すでに19世紀の比較的早い時期にモンティチェロを訪れたある客は、「これだけ徹底したそして完全な科学的発明・発見お

よび遺物、道具、装飾品の収集を有する人は[国内に] いないであろう」と評したのであった。<sup>41</sup>

エントランス・ホールにはマストドンの骨の一部および大鹿の角が陳列されていたが、それらはジェファソンが大統領として派遣したルイス＝クラーク探検隊の持ち帰ったものであった。原住インディアンによるさまざまな工芸品——弓、矢、矢筒、槍、タバコ・パイプ、ワンパム〔貝殻玉〕・ベルト、モカシン〔革靴〕、料理の道具など——の幾つかは、ジェファソンが寄贈されたものであった。ティー・ルームには著名なフランスの彫刻家ウドン(Houdon)によるワシントン、ジョン・ポール・ジョーンズ(John Paul Jones)、ベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin)、ラファイエット(Lafayette)の石膏の胸像が置かれていた。他に、多数の絵画の複製（その中には「バプテスマのヨハネの頭を持つヘロデア」という宗教画もあった）が飾られていた。そして通常の訪問客の目に触れるることはなかったが、彼の書斎には、彼自身の発明による一度に同じ書類を2通書くことができるポリグラフ（複写機）、回転式譜面台、設計用机、さらに彼の連邦上院議長席の椅子などがあった。これらの品はいずれもアメリカ合衆国建国期の出来事のすぐれた象徴であり、それらを陳列することによって、彼もまたその歴史的事件に参加したことを誇示できたのであった。

ウィリアム・ハワード・アダムズの言葉を再び借りるならば、ジェファソンの建物は「今やアメリカのモンティチェロ、いいかえれば民主主義の偉人＝トマス・ジェファソンの神格化を記念する殿堂」になっているといえよう。<sup>42</sup>しかし純粹に個人の保有からいわば国家的記念建造物になるためには、ジェファソンがそれを完成させるに要したと同じ程度の、否、それ以上の、長い期間が必要なのであった。<sup>43</sup>

41. *Niles Register*, 1816: quoted in Wilstach, pp.108-09.

42. Adams, p.384.

43. 以下の記述は、James A. Bear, Jr., "Monticello," in Weymouth, pp.445-52による。

39. *Visitors*, p.47.

40. Adams, p.230.

ジェファソンが1826年に没した後、モンティチェロがジェファソン家の手から離れるであろうことはほぼ自明であった。なぜならばジェファソンが存命中に累積されたかなりの負債を支払う唯一の方法は、モンティチェロを含む固定資産を売却することだったからである。まず奴隸、家具、農耕器具、家畜などが売られ、邸宅と農耕地は残しておく努力がなされた。しかし後者の大部分も、やがて処分される。最後に残された邸宅も、1831年にバークレー(James Turner Barclay)という人物に売られる。バークレーはそこに養蚕場を作る計画であった。しかし2年後に邸宅と周辺の土地は再び売りに出され、1836年に合衆国海軍士官でニューヨーク在住のユライア・フィリップス・レヴィ(Uriah Phillips Levy)が購入した。レヴィはジェファソンに対する尊敬の念から、モンティチェロが徒に朽ちていくのを阻止するために私財を投じたのであった。モンティチェロの歴史は以後レビ家を中心に動くことになる。

1862年に没した時ユライア・レヴィは、モンティチェロがアメリカ合衆国に委譲され、合衆国海軍准士官の子弟のための農業訓練所となるという遺言を残したのであった。しかし南北戦争の最中であり、モンティチェロは南部連合政府の没収するところとなり、1864年には競売にかけられる。その後1879年に、ユライア・レヴィの甥、ジェファソン・モンロー・レヴィ(Jefferson Monroe Levy)がモンティチェロを買い求めたのであった。

ジェファソン・レヴィは叔父と同じく私財を投じ建物の維持などに努めたが、一方では名所を一目見たいと願う侵入者の波に悩まされ、他方ではモンティチェロを私物化しているのではないかという批判に耐えなければならなかつたのである。事実、レヴィの手によりモンティチ

エロの内装は当時はやりのヴィクトリア風のものになり、ジェファソンの在世中とは大いに異なったものになり、外部も荒れた様を見せていたのであった。

モンティチェロは公的管理のもとに置かれるべきであるという声は1890年代から聞かれたが、ようやく1922年になってニューヨーク市で関係者の会合が持たれ、翌年のトマス・ジェファソン記念財団の発足に導く。財団の主要な仕事はモンティチェロの購入に必要な50万ドルを募ることと、建物と周辺部の修復にかかる資金を集めることであった。いずれの作業も順調に進み、とくに後者に関しては建築家フィスク・キンボール(Fiske Kimball)と彼の主宰した修復委員会はその後30年間に50万ドル近い資金を用いて、元の家具・食器・絵画・展示品をモンティチェロに集めることに成功したのであった。1940年以来、バージニア・ガーデン・クラブの協力により、ジェファソンが実際に植えたのと同じ種類の花や草が育てられている。1953年には内装が完全に修復され、空調設備が置かれるようになった。さらに近年には、屋根の取り替え、野菜園・果樹園の復旧などの計画があり、また一部進行している考古学的発掘を通して（陶磁器・食事の残滓などが出ている）モンティチェロの日常生活を正確に再現させる試みもなされている。今日我々の見るモンティチェロは、ジェファソン自身および彼の家族、訪問客、白人の職人、奴隸などの人間の姿、そしてマルベリー・ロウの建物を除いて、ジェファソンが生きていた頃の姿に近いものになっている。ここを訪れる者は、建物を見、その歴史を知ることにより、ジェファソンがその創設に貢献した新しい共和国の歴史について学び、そして何よりもましてそれについてのジェファソンのヴィジョンを想起することができるのである。

図1第一次モンティチェロ立面図

(ジェファソン作成)  
(Adams' Jefferson's  
Monticello, p.55)

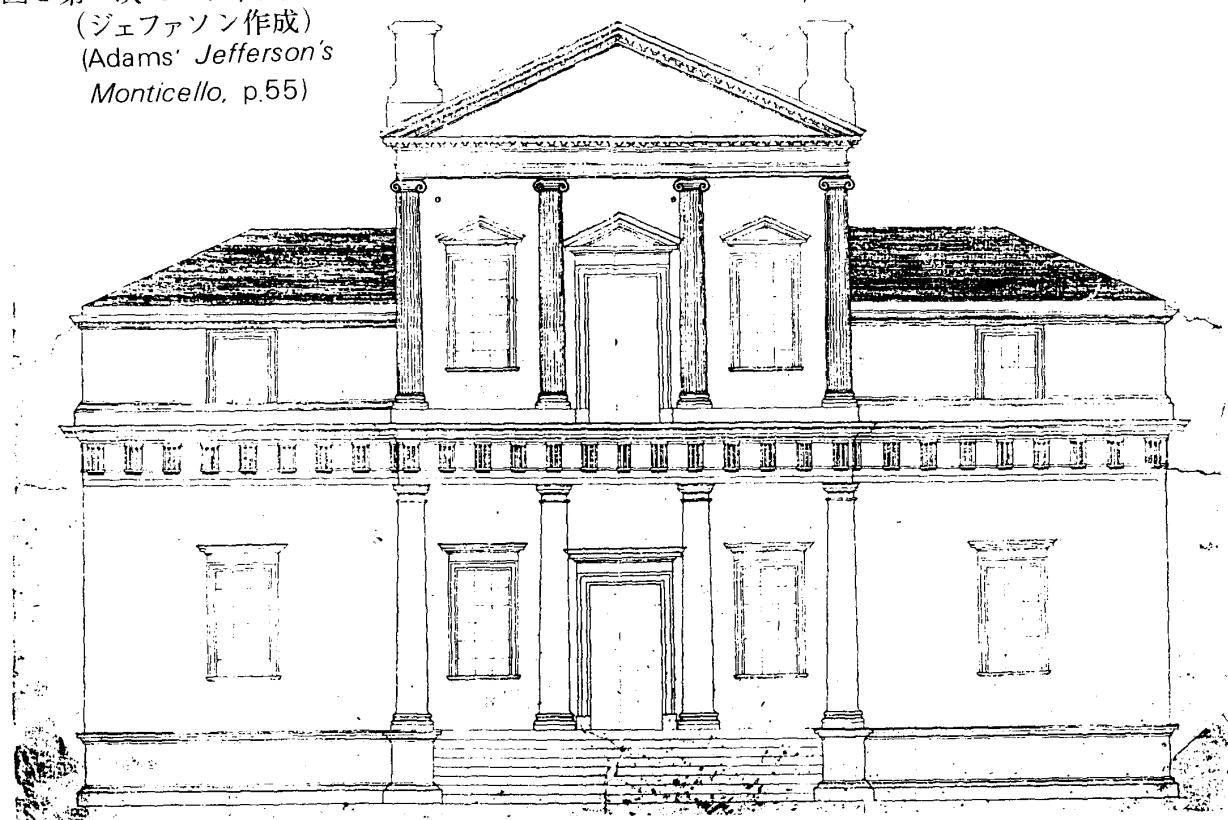
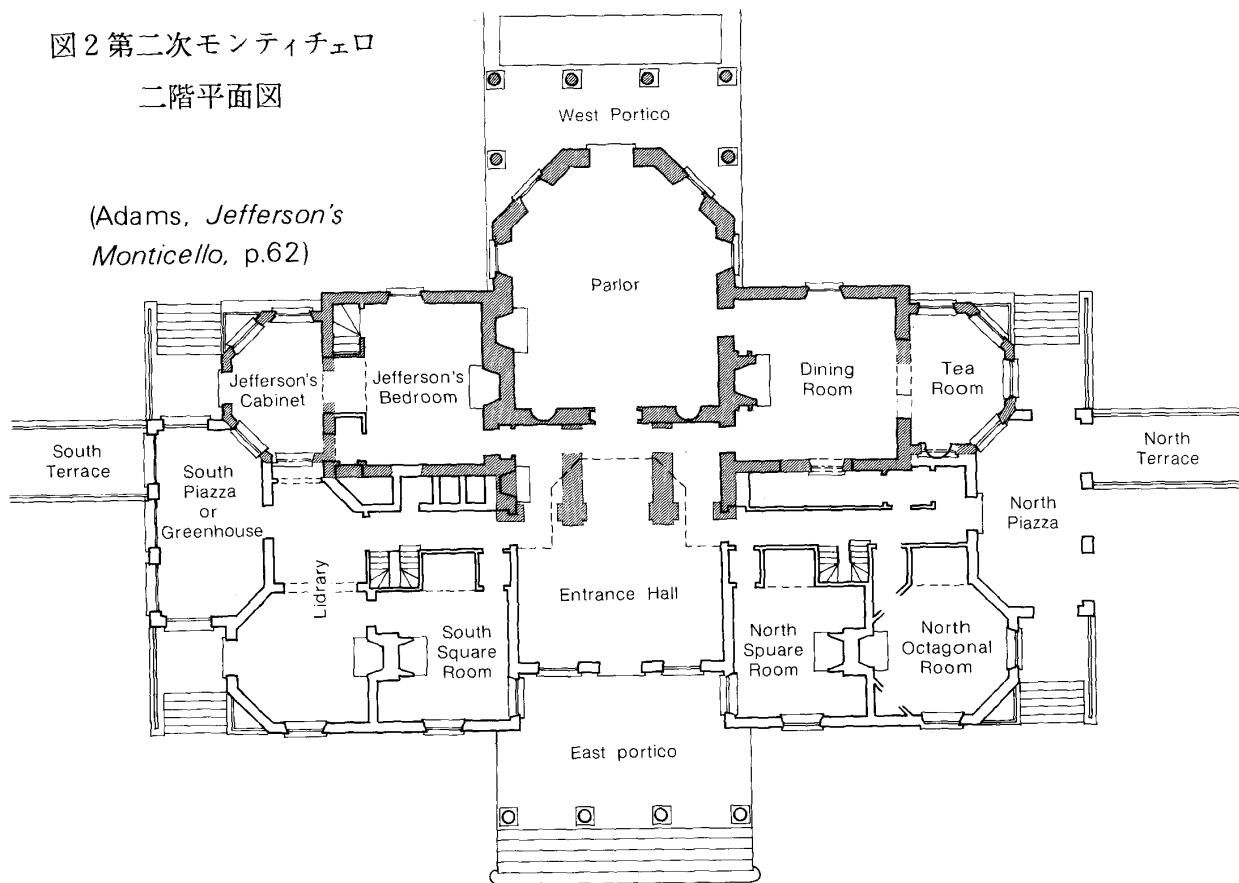


図2第二次モンティチェロ

二階平面図

(Adams, Jefferson's  
Monticello, p.62)



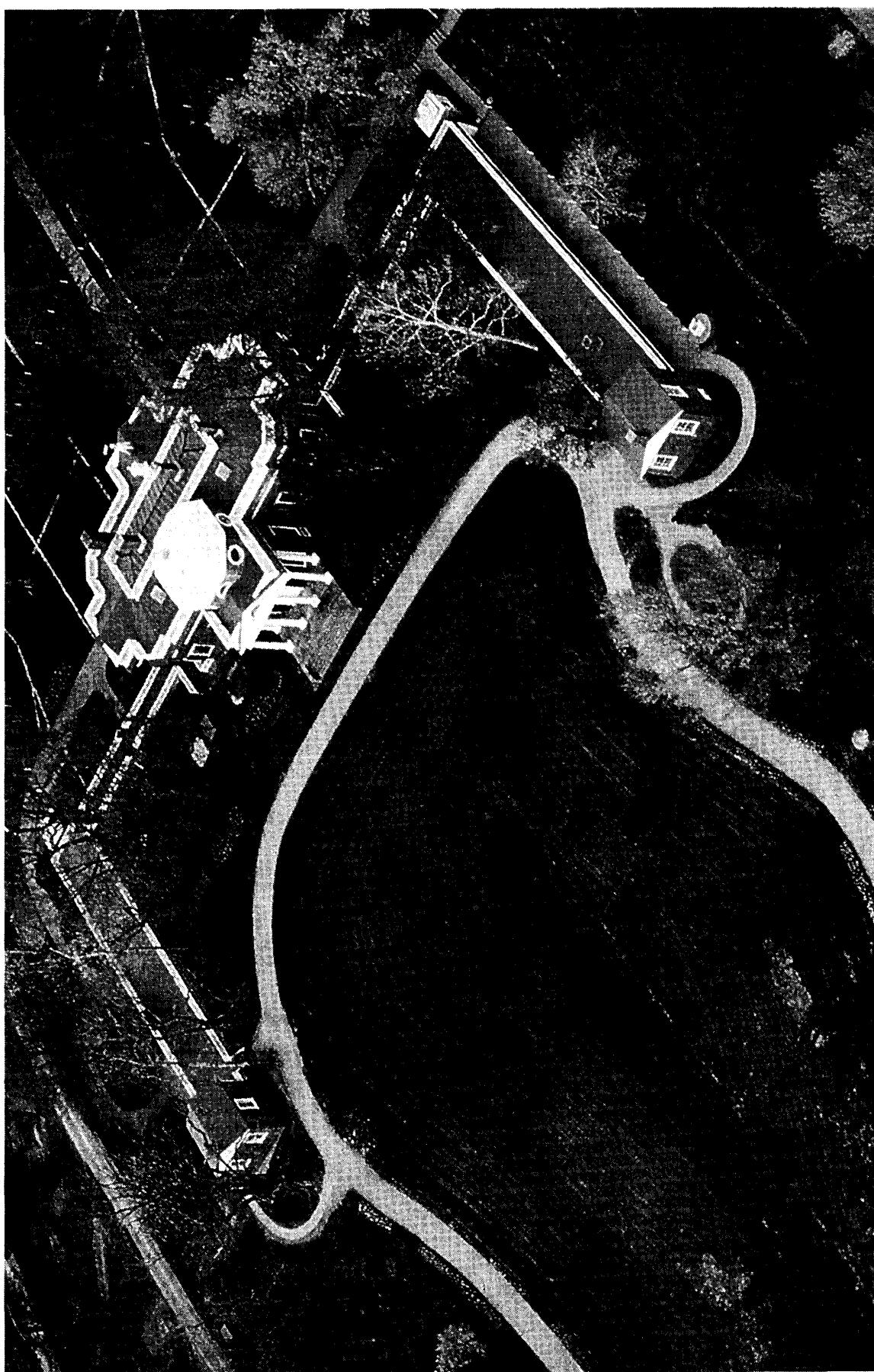


図3 モンティチエロ  
(トマス・ジェファソン記念財団)